

## 自然から大地へ

### ——中期ハイデガーにおける自然への問いの展開

三 谷 竜 彦

#### 序

ハイデガーは一九三五年および一九三六年に講演された『芸術作品の根源』の中で、大地という概念を、世界という概念と対抗関係にあるものとして、一見唐突な仕方を持ち出している。この大地という概念は、当時ハイデガーが取り組んでいたヘルダーリン解釈から取ってこられたものであるが、ハイデガー自身の哲学の中では、すでによく知られていた（意味上の変遷はあるものの）世界という概念とは違って「全くもって新しいものであった」<sup>(1)</sup>。したがってガダマーが述べているように、大地という概念をハイデガー自身の哲学の中に「いかなる権利をもつて」取り入れることができるのか、<sup>(2)</sup>ということが当然問題とならざるをえない。この問題を解決するためには、ハイデガー自身がいかなる思惟の歩みを経て、大地という概念を自身の哲学の中に取り入れるに至ったのか、ということが明らかにされなければならない。そしてそのことによつて我々は、大地という概念は『存在と時間』以降のハイデガーにとつての一つの重要な問い、すなわち自然への問いが深く問われて行つた際の一つの帰結であつた、ということを明らかにすることができる。

本稿はこの目的へと向かつて、差し当たっては大地という概念から離れて、ハイデガーの自然への問いの展

開を追跡する、という仕方では考察を進め、そして最後に、その問いの展開が大地という概念にたどり着く過程を明らかにする。

### 一 自然に出会うための通路への問い（その一）——『根拠の本質について』

ハイデガーの自然への問いの開始は、表明されている限りでは一九二八年から一九二九年にかけてである。この時期の彼の自然への問いは、自然はどのようにして我々に出会われるのか、どのような通路を通じて我々は自然に出会うことができるのか、という問いとして問われている。一九二八年に書き上げられ、一九二九年に発表された『根拠の本質について』の中のある注において、ハイデガーは『存在と時間』の中で自然が論じられていないことの決定的な理由について、次のように述べている。

「自然は環境世界の境界内で出会われることはないし、またそもそも第一次的には、我々がそれへと態度を取る、(sich verhalten) と、ころのものとして出会われることはなく」(GA9, S. 155Anm.)。

ここで表明されていることは、自然に出会うための通路としては、環境世界や態度を取ることというのは不適切である、ということである。それでは自然に出会うためには、いったいどのような通路が選ばなければならないのか。ハイデガーは続けて次のように述べている。

「自然は根源的には現存在の内において開明的 (offenbar) であるわけだが、それは現存在が情態的に気分づけられたものとして存在者のただ中で (imitten von) 実存している、ということによってである」 (ibid., S. 155f. Anm.)。

ここで表明されていることは、自然に出会うための通路として、「情態的に気分づけられ」て「存在者のただ中で実存している」ことが適切である、ということである。ここで「情態的に気分づけられ」ていることというのは情態性を、すなわち被投性を意味する (vgl. ibid., S. 156 Anm.)。ハイデガーによれば、この被投性としての情態性は「ただ中で」ということと緊密に連携している (vgl. ibid., S. 166)。それではなぜ自然に出会うための通路として、この被投性や「ただ中で」ということが適切であって、環境世界や態度を取ることが不適切であるのだろうか。その際まず明らかなのは、環境世界の中で自然が出会われないことの理由である。これは、上に引いた引用と同じ『根拠の本質について』の注の中で、ハイデガーが次のように述べていることから明らかである。

「《環境世界的》存在者の存在論的構造は——その存在者が道具として発見されている限り——世界現象を最初に特徴づける、このために……長所を持っている」 (ibid., S. 155 Anm.)。

ここで環境世界的存在者、すなわち環境世界の中で出会われる存在者は道具として発見される、ということが表明されている。このことは『存在と時間』における環境世界についての分析の中で明らかであるが、この

ために、道具として発見されるのではない自然という存在者は環境世界の中では出会われない、ということになる。

次になぜ自然に出会うための通路として、被投性や「ただ中で」ということが適切であって、態度を取ることが不適切であるのか、という問題に関しては、一九二八／二九年冬学期講義『哲学入門』の中で、態度を取ることと被投性および「ただ中で」ということとの関係について、ハイデガーが展開している詳細な議論が参考になる。まずはそれらの関係について、『哲学入門』における論述に依拠しつつ明らかにして行くことにしよう。

## 二 自然に出会うための通路への問い（その二）——『哲学入門』

『哲学入門』の中でハイデガーは、態度を取ることがどのようにして可能になるのか、ということをもまず明らかにし、次いでその態度を取ることと被投性および「ただ中で」ということとの関係について論じている。我々はまず、態度を取ることがどのようにして可能になるのか、ということについて確認して行くことにしよう。

ハイデガーによれば、現存在は存在了解によって、「己の存在においてこの己の存在それ自体が問題である」（GA27, S. 326）ようになり、かくして「己自身へと委ねられて」（überantwortet）する」（ibid., S. 324）。このように「己自身へと委ねられ、己自身が問題である」ということは、「己自身のために（unwillen seiner selbst）存在することである（vgl. ibid., S. 324f.）」。しかしこの事態は決して利己主義的に解釈されてはならない（vgl. ibid., S. 324; GA9, S. 157）。現存在は「本質上己の外へと歩み出してしまう」（GA27, S. 326）おり、「本質上決して

存在者から孤立していない」(ibid., S. 328)。つまり現存在の「最も固有な存在に本質上属している諸々の存在可能性」が、「他者との共存在や眼前にあるもの (Vorhandenes) のもとでの存在や自己存在」とされているように (ibid., S. 324; vgl. GA9, S. 163) 、現存在の存在には常に、己自身への関係性とともに、己以外の存在者への関係性も潜んでいるのである (vgl. SZ, S. 13, 123, 152, 324)。したがって現存在が己自身の存在を問題にし、「己自身のために」存在することの内には、常に己自身および己以外の存在者への関係性が含まれているのであって、現存在が「己自身のために」存在するということは、常に己自身および己以外の存在者との関係性の内にあるところの己自身の存在を問題にして存在することなのである。そしてハイデガーはこのような関係性を、現存在が存在者および己自身へと「引き渡されていること (Preisgegebenheit)」と呼んでいる。そしてこのように「引き渡されていることは、己自身のためにということに基づいているのであるが、このように引き渡されていることのみが、存在者への何らかの対決や態度取り (Verhaltung) を可能にする」(GA27, S. 326)。つまり現存在の態度取りは、現存在が存在者および己自身へと「引き渡されていること」に基づいており、ひいては「己自身のために」ということに、さらには存在了解に基づいているのである。逆にいえば存在了解が「己自身のために」ということを導き出し、そしてこの「己自身のために」ということが、「引き渡されていること」を介して態度を取ることを可能にするのである。

それではこのようにして可能になる態度を取ることが、どのようにに被投性および「ただ中で」ということと関係しているのだろうか。ここで何よりも問題となるのは、「引き渡されていること」という契機である。ハイデガーによれば、存在了解および「己自身のために」ということに基づいて捉えられた「引き渡されていること」は、「引き渡されていること」の規定としてはまだ不十分である (vgl. ibid., S. 328)。なぜならそのよう

にして捉えられた「引き渡されていること」においては、確かに「現存在は存在者へと引き渡されているけれど、依然としていわば存在者の上を漂っている何らかの主観であるように見える」(ibid., S. 328)からである。それではいったい何が不足しているのだろうか。現存在は「単に存在者(へと(an))引き渡されているだけではないのであって、現存在は現存在である限り、存在者のただ中で情態的にある」(ibid., S. 328; vgl. GA9, S. 166)。つまり「引き渡されていること」を十分に捉えるためにはさらに、現存在が「存在者のただ中で情態的にある」ということが必要なのである。ここで「(ただ中で)」ということが意味しているのは、現存在が、それへと己が引き渡されている存在者によって、徹底的に支配されていることである」(GA27, S. 328; vgl. GA9, S. 166)。そしてこのように現存在を徹底的に支配している存在者こそ、まさに自然である。ところでその際「問題となっているのは、原則的により広く、より根源的な自然概念である。これはすなわちナートウーラ(natura)・ナースキー(nasci)・それ自身の方から(von sich her)」ということであって、自由な自己としての現存在はこれに対して無力である。現存在は……自然へのあらゆる自由な態度を取ることの前に、自然のただ中で存在している」(GA27, S. 329)のである。そしてこのような事態こそまさに被投性に他ならないのであって、このような被投性こそまさに「引き渡しの本来的な本質」を規定するものである(vgl. ibid., S. 329)。したがって「存在者へのあらゆる態度を取るとは常に、被投性という意味での、存在者へと既に引き渡されていることから生じる」(ibid., S. 329)のである。

以上において明らかになったことから、なぜ自然に出会うための通路として、被投性および「ただ中で」ということが適切であって、態度を取ることが不適切であるのか、という問題に対して答えることが可能になる。まず自然が被投性および「ただ中で」ということを通じて出会われるのは、今や明らかになっているよう

に、まさに自然こそが被投性および「ただ中で」ということを通じて出会われる存在者であるからに他ならない。他方自然に出会うための通路として態度を取ることが不適切であるのは、態度を取ることが被投性に基づいているだけではないからである。もし態度を取ることが被投性のみに基づいているのであれば、態度を取ることでもまた自然に出会うための通路として適切であるに違いないだろう。態度を取することは被投性以外の別の根拠を持っている。それはつまり存在了解および「己自身のために」ということである。したがって態度を取ることが自然に出会うための通路として不適切であるのは、結局のところ存在了解および「己自身のために」ということがそのような通路として不適切であるからなのである。そしてこのことからまた、環境世界が自然に出会うための通路として不適切であるということの理由も、さらに確固たるものとなる。なぜなら『存在と時間』において環境世界は、現存在自身の「ためにということ」(Unwillen)に基づいて捉えられているからである (vgl. SZ, S. 83-88, 143-147, 192)。

以上において、なぜ自然に出会うための通路として、被投性および「ただ中で」ということが適切であって、環境世界および態度を取ることが不適切であるのか、ということが明らかになった。ところでしかし、ここで一つの疑問が生じる。それはすなわち、態度を取ることが存在了解および「己自身のために」ということのみに基づいているのではなく、被投性にも基づいているのである以上、その態度を取することは自然に出会うための通路として、完全に不適切であるわけではないのか、ということである。実際、自然がどのようなして出会われるのか、ということに関して、最初に『根拠の本質について』から引用を引いた際、「自然は……そもそも第一次的には、我々がそれへと態度を取るところのものとして出会われることはない」と述べられていた。この引用の中で注目すべき語は、「第一次的には (primär)」という語である。つまり自然に出会うた

めの通路として、態度を取ることが「第一次的には」不適切である、ということとは、裏返していえば、態度を取ることはそのような通路として二次的には適切である、ということ述べているのではないだろうか。ハイデガーは実際、「己自身のために」ということと被投性とのある種の共属関係について語っている。ハイデガーによれば、「被投性は本質的に、その存在が己自身のためにということによって規定されているような存在者にのみ帰属しうる」(GA27, S.330)。つまり被投性は現存在の在り方として、「己自身のために」ということと切り離し難く結びついているのである。したがって自然は、なるほど「第一次的には」被投性を通じて出会われるのであるが、しかしその被投性が常に「己自身のために」ということと結びついている以上、常にまた「己自身のために」ということに基づいた何らかの態度取りにおいても、つまり何らかの二次的な仕方においても出会われることになるであろう。要するに自然は二重の仕方で出会われることになるであろう。このことは、ハイデガーの自然への問いにおいて一つの中心的な問題となっている。そしてこの問題が具体的に展開されるのは、一九二九／三〇年冬学期講義『形而上学の根本概念』の内においてである。

### 三 ビュシスとロゴスへの問い——『形而上学の根本概念』

『形而上学の根本概念』の内におけるハイデガーの自然への問いは、もはや自然に出会うための通路についてではなく、直接的に自然そのものについて問うている。しかし自然といっても、それは今やビュシス(*byusis*)として捉えられている。先に見たように、被投性を通じて出会われる自然とは「原則的により広くより根源的」に捉えられた自然であり、それはすなわちナートウーラ、ナースキーであるが、これらのラテン語は『形而上



学の根本概念』の中で、「ギリシア語のピュシス、ピュエイン (puein) の根本意義」を言い表している、とされる (vgl. GA29/30, S. 38)。かくして自然への問いは、今やピュシスへの問いへと展開して行くことになる。

ハイデガーによればピュシスとは、「全体としての存在者の自己自身を形成しつつある支配」(ibid., S. 38f.) を意味しており、したがってまたそのように自己自身を形成しつつある全体としての存在者それ自体をも意味している。ところで人間は、ピュシスという「この全体的な支配によって徹底的に支配されており、それに対して無力である」(ibid., S. 39)。このことは、まさに『哲学入門』の中で述べられていた被投性の規定そのものである。人間はピュシスへの被投性の中で存在しているのであり、ピュシスは人間の被投性の中で出会われるのである。ところでしかし人間は、ピュシスによってただ支配されているだけではない。ピュシスによって支配されながらも、その一方で「人間は人間として実存している限り、ピュシスについて、すなわち己自身が属している支配しつつある全体について、常にすでに言明してしまっている」(ibid., S. 39f.)。しかも「人間として実存するということがすでに、支配しつつあるものを言明へともたらすということを意味している」(ibid., S. 40)。それでは言明とはいったいかなるものなのであろうか。

「言明されたものとは、話すことの内で開明的になったものである。話すことはギリシア語ではレゲイン (legein) といわれる。したがって言明された支配はロゴス (logos) である」(ibid., S. 40)。

つまり言明すること、言明へともたらすこととは話すことであり、レゲインである。そして言明されたものとはロゴスである。ところでしかしロゴスはピュシスに基づいて言明されるのであるから、ロゴスとしての

「言明されたものは、すでに必然的にピュシスの中にあり」、「ピュシスに属している」(ibid., S.40)。したがってロゴスとは、レゲインによって言明されている限りでのピュシスであることになる。そしてさらにハイダーは、ヘラクレイトスのある断片の中でレゲインが、「隠蔽すること(Verbergen)」を意味するクリュプティン(kryptein)の反対語として用いられていることから、レゲインおよびロゴスに関して次のように述べている。

「レゲインの根本概念および根本意義は、〈隠蔽性(Verborgenheit)から取り出すこと〉、覆いを取り除くこと、隠蔽性から取り出すこと、隠蔽性から取り除くこと、隠蔽性から取り出すこと」が、ロゴスの内において生起している生起である。つまりロゴスの内において存在者の支配は覆いを取り除かれ、開明的になるのである」(ibid., S.41)。

つまりレゲインは隠蔽性から取り出すこと、覆いを取り除くことであり、ロゴスはそのようなレゲインによって言明されたピュシスとして、隠蔽性から取り出され、覆いを取り除かれたピュシスである。そうすると逆に、ピュシスそれ自身は「いわばそれ自身を隠蔽しようとしているに違いない」(ibid., S.41)ことになる。このようにしてピュシスは隠蔽性に対応するものとされ、それに対してロゴスは覆いを取り除くことに、すなわち非隠蔽性としての真理に対応するものとされることになる。

ところでここで我々が注目しなければならないのは、ピュシスとロゴスとの関係である。先に我々は、『根拠の本質について』および『哲学入門』におけるハイダーの自然への問いについて論じた際に、自然は二重

の仕方では出会うのではないか、という問題に突き当たった。今や我々は、その自然の出会いの二重性という事態を、以上見てきた『形而上学の根本概念』におけるハイデガーの自然への問いの中に見出すことができる。それがすなわち、ピュシスとロゴスとのある種の二重的関係である。ピュシスとロゴスとがある種の二重的関係にあることについては、もはや詳説するに及ばないであろう。ロゴスは、レゲインによって覆いを取り除かれた限りでのピュシスであって、それに対してピュシスは、レゲインによって覆いを取り除かれていない限りでのピュシスである。こうしたピュシスとロゴスとのある種の二重的関係は、自然の出会いの二重性を意味しているといえよう。ところでしかし先に我々が突き当たった、自然の出会いの二重性とは、被投性の中で自然の第一次的な出会いと、「己自身のために」ということに基づく態度取りの中の、自然のいわば二次的な出会いとの二重性であった。この二重性と、『形而上学の根本概念』の中で我々が捉えた、ピュシスとロゴスとの二重的関係とは、果たして対応しているのだろうか。まずピュシスが、被投性の中の自然の第一次的な出会いに対応していることは、先に見た通り明らかである。しかし一方ロゴスが、「己自身のために」ということに基づく態度取りの中の自然の二次的な出会いと対応しているかどうかということは、まだ判然としない。したがってこのことが明らかにされなければならない。

先に述べたように、そもそも「己自身のために」ということは存在了解に基づいている。したがって「己自身のために」ということに基づく態度取りは、そもそも存在了解に基づいていることになるのであり、ゆえに我々は、この存在了解とロゴスとの対応関係について明らかにしなければならないことになる。そしてこの存在了解とロゴスとの対応関係については、すでに『存在と時間』の中で示唆されている。『存在と時間』におけるロゴスは基本的に、覆いを取り除くこととしてのレゲインおよびロゴスに由来する、アリストテレスの口

「*ノス*概念 (vgl. *ibid.*, S. 44; GA40, S. 179)」、すなわち「*アポファイネスタイ* (*ἀποφαίνεσθαι*)」および「*アポファンシス* (*ἀπόφανσις*)」に定位して論じられている。その際「*アポファンシス* (*ἀπόφανσις*)」としての「*ロゴス*」は、「了解に基づく解釈の一つの派生的な様態である」(vgl. SZ, S. 153f.)。つまりここで「*ロゴス*」は、「解釈の派生的な様態として了解に基づいているのである。したがって存在了解の持つ、いわば存在へと接近するための通路という性格を」(vgl. *ibid.*, S. 152, 183, 200, 212, 372, 437)、「実際「*ロゴス*」もまた持つのである」(vgl. *ibid.*, S. 25, 37, 154)。「そしてさらに同様のことは『形而上学の根本概念』の中でも述べられている。そこにおいて「*アポファンシス*としての「*ロゴス*」は企投 (*Entwurf*)」に基づくものであるが」(vgl. GA29/30, S. 492-532)、「この企投には存在者の存在を露呈させる (*enthüllen*)」ことが属している」(vgl. *ibid.*, S. 529f.)。したがってこのような企投に基づくものとしての「「*ロゴス*」の中で……存在が言われうる」」(*ibid.*, S. 468) であり、かくして「*ロゴス*」とは「存在者そのものへと態度を取ることに関する可能性」(*ibid.*, S. 489) である。したがってこれらのことから、「*ロゴス*」が存在了解に基づいており、存在了解と同じ働きをするものとして、存在者へと態度を取ることが可能にするものであることは明らかである。このような仕方では「*ロゴス*」と存在了解とは対応関係にあるのである。

以上のようにして我々は、『根拠の本質について』および『哲学入門』における自然への問いの中に見て取られた、自然は二重の仕方では出会われるという事態が、『形而上学の根本概念』における自然への問いの中で、「*ピュシス*」と「*ロゴス*」との二重の関係として捉え返されていることを確認することができた。自然、すなわち「*ピュシス*」は、「*ピュシス*」と「*ロゴス*」という二重の仕方において、したがってまた「*隠蔽性*」と「*非隠蔽性*」という二重の仕方において出会われるのである。

#### 四 自然（ピュシス）から大地へ

そこで次に我々は、そのピュシスとロゴスとの二重的関係に対応する、隠蔽性と非隠蔽性との二重性に注目しなければならない。なぜなら『芸術作品の根源』の中で大地が、非隠蔽性に対応する世界に対して、隠蔽性として捉えられているからである。つまりピュシスとロゴスとの二重的関係は、『芸術作品の根源』の中で隠蔽性と非隠蔽性との二重性を介して、大地と世界との二重的関係として捉え返されているのである。それではどのようにしてロゴスが非隠蔽性を介して世界として、またピュシスが隠蔽性を介して大地として捉え返されるに至るのか、ということを明らかにすることになろう。

そのためには、我々は『芸術作品の根源』の中で主題とされているものに注目しなければならない。なぜならその主題をめぐってこの講演における探求がなされているからである。この講演の中で主題とされているのはもちろん芸術作品であり、その根源としての芸術である。そして芸術はその本質においては詩作(Dichtung)である (vgl. GA5, S. 59f., 62f.)。

一九三五年夏学期講義『形而上学入門』の中で詩作は、それを通じてピュシスが世界として非隠蔽的になるところの、人間の暴力活動 (Gewalttätigkeit) の一つである、とされている (vgl. GA40, S. 66f., 166)。そしてこの人間の暴力活動には、レゲインおよびロゴスもまた属している (vgl. ibid., S. 178)。つまり詩作とレゲインおよびロゴスとは、ともに人間の暴力活動として、ピュシスを世界として非隠蔽性の内へともたらしめるのである。ところで『形而上学の根本概念』においてロゴスとは、レゲインによって非隠蔽性へとともたされたピュシスであった。このようなロゴスとピュシスとの二重的関係は、今や人間の暴力活動としての詩作の中

で、世界とピュシスとの二重的関係として捉えられることになる。ロゴスと世界とはこのような対応関係にあるのであり、それゆえに詩作としての芸術について主題的に論じた『芸術作品の根源』の中で、非隠蔽性として世界が論じられることになるのである。

それでは一方の大地についてはどうか。なぜピュシスは『芸術作品の根源』の中で大地として捉え返されることになるのであろうか。『芸術作品の根源』の中で、なるほどピュシスと大地との相関関係が示唆されているが(vgl. GA5, S. 28)、これにとどまらず我々は、詩作の中で大地という観点において考察しなければならぬ。冒頭で述べたように、大地という概念はヘルダーリン解釈から取ってこられたものであると考えられる。ハイデガーによれば、ヘルダーリンにとって大地とは「根源的な意味において隠蔽的なもの」、すなわち「隠蔽性そのもの」である(GA39, S. 242)。このようなものとして大地は、ハイデガーにおける、それ自身を隠蔽しようと努めるピュシスと対応する。ハイデガーにとってヘルダーリンは、詩人および詩作そのものについて詩作した「詩人の詩人」(GA4, S. 34; GA39, S. 30, 218-221, 252)であり、「最大の詩人」(ibid., S. 6)であった。したがってハイデガーが『芸術作品の根源』の中で、詩作としての芸術について論じる際に、その詩作としての芸術において出会われるピュシスが、「詩人の詩人」であり「最大の詩人」であるヘルダーリンの言葉で語られることになったのは、ある意味で必然的なことだった、といえる。

以上、ロゴスとピュシスとが『芸術作品の根源』の中で、それぞれ世界と大地として捉え返されるに至る過程を明らかにしたことによって、大地という概念は、『存在と時間』以降のハイデガーの自然への問いが、その展開の過程でたどり着いた一つの帰結である、ということを確認することができた。自然から大地へ——中期ハイデガーの自然への問いは、このようにして展開して行ったのである。

## 結 び

大地とは詩作において出会われるピュシスである。ガダマーは、大地とは「せいぜい詩作の世界の中で居住権を持ったかもしれない」ようなものと思われた、と述べ、その際この言を否定的な意味合いをもって述べているのであるが、我々はこの言をむしろ肯定的に受け取ってよいであろう。なぜならハイデガーは、一九三四／三五年冬学期講義『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』の中で、詩人、思惟者、国家創造者の三種の創造者の中で、詩人を第一番目に、すなわち根源的な位置に置いているからである(vgl. *ibid.*, S. 51, 120, 144)。その意味において、詩作において出会われるピュシスとしての大地は、ピュシスの根源的な在り方である、と考えてよいであろう。そしてそのように考えるならば、自然から大地へという中期ハイデガーにおける自然への問いの展開は、自然の根源を探り出す問いの道筋であった、と規定することができるように思われる。

## 注

※ハイデガーの著作からの引用および参照の指示に際しては、以下の略記号を用いる。

SZ: *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Max Niemeyer, 1993

UK: *Der Ursprung des Kunstwerkes*, Reclam, 1970

GA4: *Gesamtausgabe*, Bd. 4, *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*, Vittorio Klostermann, 1981

- GA5: Gesamtausgabe, Bd. 5, *Holzwege*, Vittorio Klostermann, 1977
- GA9: Gesamtausgabe, Bd. 9, *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 1976
- GA27: Gesamtausgabe, Bd. 27, *Einleitung in die Philosophie*, Vittorio Klostermann, 1996
- GA29/30: Gesamtausgabe, Bd. 29/30, *Die Grundbegriffe der Metaphysik/Well-Endlichkeit-Einsamkeit*, Vittorio Klostermann, 1983

GA39: Gesamtausgabe, Bd. 39, *Hölderlins Hymnen (Germanien) und (Der Rhein)*, Vittorio Klostermann, 1980

GA40: Gesamtausgabe, Bd. 40, *Einführung in die Metaphysik*, Vittorio Klostermann, 1983

\*

\*

\*

- (1) Joseph J. Kockelmans, *Heidegger on Art and Art Works*, Martinus Nijhoff, 1985, p.78
- (2) Hans-Georg Gadamer, "Zur Einführung", in UK, S. 109
- (3) Ibid., S. 108